

今日の物語において著者は何を語ろうとしているのでしょうか。ユダヤの慣習によれば、男子は満 13 歳で律法遵守について一人前とされます。マリアとヨセフは当時の慣習に従って過越祭を祝うためにエルサレムに来ました。過越祭が終わり、ナザレに帰る途中で夜になり泊まろうとするとイエスがいません。二人は三日目になって神殿の中で教えを受けているイエスを見つけました。48 節のマリアの言葉に対して、49 節のイエスの答えは何とも可愛げのないものです。この物語の頂点は両親の心配でもイエスが見つかったことでもなく、49 節のイエスの言葉にあります。48 節のマリアの言葉の中の「お父さんもわたしも」は、原文では「あなたの父とわたしは」です。その言葉を受けて、イエスは自分の父として神さまを指して答えています。更に、「自分の父の家にいる」は原文では「自分の父のもとにいる」です。また、「当たり前だ」はこの福音書独特の言葉で、「神さまによって定められた」という意味です。従って、49 節の言葉は「私が自分の父のもとにいるように神さまから予め定められた」という意味なのです。著者は少年イエスの物語を通して、イエスは単なるマリアとヨセフの子ではなく、神さまの子である、と告げているのです。ここに「御子は復活して神の子と定められた」という原始教会の信仰が表されています。

また、「神と人ともに愛された」と訳されている言葉の直訳は「神からと人からの恵みにも進捗していた」です。著者はサム上に記されている少年サムエルの記述を用いて、「聖なる者、神の子」として「神からも人からも恵みを受けつつ、順調に成長していった」と記しました。それはイエスが受洗した時の神さまの言葉「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」へと続きます。

この物語の「探す」「見つける」というテーマは、この福音書におけるイエス復活伝承の用語です。復活は死んで三日目という原始教会の信仰に沿って、両親が 12 歳のイエスに三日目に出会ったように、弟子たちも三日目にイエスに会うのです。この福音書の復活物語では、復活させられたイエスに出会っても単なる旅人だと思い、食事の席での復活させられたイエスの振る舞い、「目が開けられ」という神さまからの働きかけによってイエスだと認めたのでした。両親はイエスを神殿の中で見つけましたが、イエスが自ら説明するイエスの本当の姿、「自分の父のもとにいるはずの者」であることを理解できなかったと記しています。12 歳のイエスの物語は成人したイエスが活動を始める旅、さらに、十字架の死、復活、昇天まで歩むエルサレムへの旅の前触れであり、著者にとって、この物語はイエスの生涯全体の縮図となっているのです。